

Title	『インディオ社会史：アンデス植民地時代を生きた人々』(網野徹哉著, みすず書房, 2017年)を読む
Sub Title	Book review : A social history of the Indios in the colonial Andes.
Author	伏見, 岳志(Fushimi, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.50 (2018.) ,p.71- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20181231-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『インディオ社会史
——アンデス植民地時代を生きた人々』
(網野徹哉著, みすず書房, 2017年) を読む

伏見 岳志

はじめに

本書は、長年にわたりアンデス社会史研究に携わる網野徹哉氏の近著である。網野氏にはこれまでも『ラテンアメリカ文明の興亡』（中央公論社高橋均との共著）、『インカとスペイン 帝国の交錯』の著作がある。いずれもシリーズのなかの一冊として執筆されたものであり、広い読者層を想定して書き下ろしたものである。これに対して、本書は、網野氏がこれまで発表してきた学術論文に、未刊行の修士論文や書き下ろしの論考を加えて、一冊の本として編纂した専門的な学術書であり、先行する二作とは性格が異なる。そもそも、日本ではラテンアメリカの植民地史に関する学術書は少なく、未刊史料に依拠した書物となると数えるほどしかない。その点だけでも、本書が出版される意義は大きい。

しかも、本書は既刊の植民地研究書と比べても、異彩を放っている。評者は、アンデス史ではなくメキシコや大西洋貿易を専門としているので、アンデス史の研究水準に照らして、本書を評価する力量はない。けれども、近接領域を研究する立場から見ると、日本のラテンアメリカ植民地史やスペイン帝国史の研究を刷新する、画期的な内容だといえる。それは議論の質だけでなく、全体の構成や史料との距離、研究姿勢などさまざまな観点から認めることができる。以下の文章が目指すのは、そういう観点のいくつかを取り上げながら、本書の特徴やその意義について、評者なりに考えていくことである。

全体を貫くビジョン？

まず、本書の構成について検討しよう。全体は、9編の論文と最後の解題の合計10章から構成されている。目次は以下のとおりである。

- 第1章 インカ王の隷属民——ヤナコーナ、アクリヤ、ミティマエス
- 第2章 植民地時代を生きたヤナコーナたち
- 第3章 通辞と征服
- 第4章 コパカバーナの聖母の涙——マリア像の奇蹟と離散のインディオたち
- 第5章 聖母の信心講とインディオの自由
- 第6章 アンデス先住民遺言書論序説
——十七世紀ペルー植民地社会を生きた三人のインディオ
- 第7章 異文化の統合と抵抗——十七世紀ペルーにおける偶像崇拜根絶巡察を通じて
(第7章には、「補遺」がある)
- 第8章 リマの女たちのインカ——呪文におけるインカ表象
- 第9章 インカ、その三つの顔——古代王権、歴史、反乱
- 第x章 謝辞と解題

最初に書かれたのは1986年の修士論文(本書では第2章)であり、いちばん最近に書かれたのは、解題を除外すると書き下ろしの第6章だと思われる。つまり、ほぼ30年という相当な時間がこめられている。日本のラテンアメリカ植民史に関する研究書の多くは、博士などの学位論文をもとに出版されたものであり、ここまでの長期にわたって書き継がれた作品は希である。しかも、30年という時間を簡単には読者に意識させないほど、叙述には一貫性がある。

この凝集力の高さは、ひとつには編集上の工夫によってもたらされている。既出の論文の場合には、発表当時の文章から大きく改稿されているわけではない。しかし、もともとスペイン語や英語で発表された4、5、8、9章は、本書に日本語で収録するにあたっては、他の章への言及や、日本の読者を想定した加筆がなされている。日本語での既出論文についても、表現の統一や、文献情報のアップデートによって、章の間に横たわる時間的なギャップが緩和されている。さらに、それぞれの論文には、書き下ろしのものも含めて、お互いを参照し合うような的確な加筆がなされている。そのために、それぞれの章は、論文としての独立性を維持しつつも、章の間に有機的なつながりが生まれるようになっている。

例として、第1章を見てみよう。ここでは、征服前のインカ時代に「ヤナコーナ」と呼ばれていた人びとが、従来は単なる「隷属民」と見なされていたのに対し、彼らにはインカに直属する「聖別された」ヤナコーナと、地方の共同体とのつながりを維持するミティマエスと呼ばれる移動民の二種類があることが、諸史料の再検討をつうじて論証されてい

る。もともとは1988年に発表された論考であり、この88年当時の文章では、聖なるヤナコーナが人身御供になりうるという史料読解に依拠した議論が展開されていたが、本書に収録されたヴァージョンでは、近年の「高高度考古学」の発掘成果を参照することで議論の拡充がはかられている。さらに、結語部分には、こうしたインカ時代の聖なるヤナコーナとは「まったく異なる新しい相貌を纏うことになる植民時代のヤナコーナに関しては、次の章で考察しよう」という一文が加筆されることで、次章との関連性が明示されている。対応する第2章でも、インカ時代のヤナコーナの特質に言及する際には、「第1章で詳しく検討したように」といった表現が、さりげなく追加されている。こうした細やかな工夫が他の章でも随所に配されていることによって、有機的一体感のある書物に仕上がっているのである（評者がひとつわからなかったのは、偶像崇拜で告発されたインディオ首長カハマルキは、第6章と第7章の双方に登場しているにもかかわらず、この点に言及した加筆がどちらの章にもなかったことである）。

さらに、論文を取録する順も、そうした統一感を醸成することの一助となっている。先述のとおり、いちばん早く執筆された論文は第2章として取録されているから、発表順に配置されているわけではない。第 x 章の冒頭で触れられているとおり、おおまかには、対象とする時代が古い論文から順番に並べられている。第1章は征服以前を扱い、第2章と第3章は征服期および植民地時代初期を対象としている。いっぽう、第4章から第8章は、植民地体制がほぼ確立した十六世紀末～十七世紀を主眼に据えた論考である。そして、第9章は、征服期から独立前夜までを辿る長いタイムスパンを視野におさめた論文であるが、十八世紀が含まれるため、最後に配されていると考えられなくもない。

しかし、第4章から第8章のほぼ同じ時代をあつかった論文群に絞って考えると、この配置には時代順では説明できない別の判断がこめられている。それは、いったい何か。評者には答えるのがなかなか難しいが、あえていうならば、前半の4・5章がリマ市に生活するインディオに焦点をあてているのに対し、後半の7・8章では徐々に偶像崇拜や恋愛魔術といったインディオ的なものの表象に分析の比重が傾いているように思われる。これは、全体の構成を見た場合に、先行する1・2・3章がやはりヤナコーナや通辞といった実在のインディオを扱い、後続の9章がインカ表象を分析していることから納得がいく。もちろん、分析の対象が前半では「人としてのインディオ」、後半では「表象としてのインディオ」とくっきりと整理できるわけではなく、少しずつ遷移しているという印象である。しかし、9章の最後にある「血と骨を備えた「生身のインディオ」と、「観念としてのインカ社会」とは、こうして切り捌かれていったのである（290ページ）」という一文

は、まさにこのことを示しているように思われる。

では、6章はどうか。ここは遺言状の分析の可能性を追求した史料論である。ここで分析される遺言状に、5章に登場する都市インディオ女性と、7章で言及されるクラカ（先住民共同体の首長）が書いた2通が含まれることを考えると、この章がまさに前半と後半のつなぐ蝶番の役割を果たしているのではなかろうか。

このように考えてみると、「生身としてのインディオ」と「観念としてのインディオ」とのふたつの関係を、史料そのものの性質を見据えながら考察したのが、本書の構成だと推察される。

「生身としてのインディオ」と「観念としてのインディオ」

では、それぞれの要素について、考えていこう。最初は「生身としてのインディオ」である。この点で示唆的なのは、本書に登場する人びとの多くが、アンデスの村落共同体の成員ではないことである。この点は、第1章と第2章がヤナコーナについて論じていることに端的に表されている。先述のとおり、第1章ではヤナコーナを、インカ王直属の聖なる隷属民や、出身共同体とのつながりを保持しつつも共同体外の王領地などで生活する移動民として描き出した。いっぽう、第2章では、ヤナコーナの意味内容が植民地時代になると変貌を遂げ、スペイン人の徴発などによって共同体を離れ、都市で暮らすようになったインディオたちを指し示すようになったことを指摘しつつ、彼らの「相貌」への接近が試みられている。第3章で考察されるのは、スペイン人のもとで通辞として従事する先住民や混血者であり、続く第4・5章はリマ市に暮らし、質屋や雑貨屋など都市経済のただなかに身を投じているインディオたちを扱うというように、本書が眼差しを向けるのは、なによりもまず共同体とのつながりが希薄化したり、失われてしまった人びとである。こうしてみると、生身のインディオを共同体成員と同一視するような立場は、断固として拒絶されていると言ってよい。

しかし、第7章はどうであろうか。この章で偶像崇拜根絶の巡察記録を手がかりにして考察されるのは、まさに村落共同体の人びとである。17世紀のアンデスでカトリック教会によって制度化されたこの巡察の目的は、村落共同体にある異教的実践、すなわちカトリック化されていない古来の信仰を発見し、駆逐することにあつた。けれども、本章の検討をつうじて浮かび上がってくる、異教的実践に与する人びとの姿は、けっして共同体に閉じこもり征服前の「伝統」を死守するインディオたちではない。例えば、都市や他村落との交通のただなかに身をおく首長やよそ者インディオたちがいる。あるいは、カトリッ

クを布教するために教区に赴任したにもかかわらず、根絶すべき儀礼に積極的に参加する聖職者たちも登場する。すでに、インディオ共同体は、植民地支配の力学の渦中のなかで、そういう多様な人びとが同居する空間へと変貌を遂げていた。ここで描き出されるのは、いわば脱領域化された共同体の相貌である。このように、本書に登場する人びとはそのいずれもが、閉鎖的な共同体の成員というインディオ像にはけっして回収することができない。

では、本書のもうひとつの関心である「観念としてのインディオ」、もしくは「インディオ的なるもの」についてはどうか。まず、「インディオ的なるもの」の担い手が閉鎖的な村落共同体の成員に限定されていないことは、いままでの検討で明らかであろう。しかも、第8章になると、主たる登場人物はインディオだけではなく多様なエスニック的背景を持つリマ市の女性たちとなり、彼女たちが実践する恋愛魔術のなかに、インディオ的なものが召還されている有様が分析されている。ここではインディオ的なるものの担い手として登場する人びとは、もはやインディオという枠内にも取まらない。

本書がもうひとつ注意深く回避しようとしているのは、インディオ的なるものが征服前から不変であると見なす姿勢である。第7章の議論に立ち戻ろう。異教の実践には、先スペイン期からの慣行を継承している部分もある。しかし、巡察の記録を仔細に検討するならば、そこには、都市などとの交通によって獲得したメガネやスペイン語の書物などの外来の品々が、なんの問題もなく導入されている。あるいは、第8章に登場するリマ市の女性たちは、恋愛魔術の呪文のなかに、インカのようなアンデス的なものだけでなく、サタンや聖マルタのようにヨーロッパ由来の観念をも取りこんでいた。このようにして析出してくる儀礼や呪文を、インディオ的/スペイン的と峻別することはもはや困難であろう。

第9章で分析されるインカのイメージも同様である。この章では、植民地時代に流通したインカ観を、(1) 彼らを単系王朝として正統化する歴史観、(2) これに挑戦し、正統性を篡奪するべく提示されるオルターナティブな歴史観、(3) 脱歴史化したインカ・イメージの3層構造として提示している。このうち(1)を取り上げると、単系王朝としてのインカというイメージは、ヨーロッパ由来の王朝観の影響下で生成し、同じくヨーロッパから導入された書記や肖像画、紋章といった技術によって確立された。つまり、このインカ像は植民地時代になって登場したのである。インカに限らず、インディオ的なるものは、植民地という状況のなかで生成するものであり、けっして先スペイン期から連綿と続く固定的なものではない。

プロセスとしてのインディオ性

しかも、この植民地におけるインカ・イメージの生成は、一度限りのものではない。(2)のようなオルタナティブな歴史観が折に触れては生起し、正統な歴史観に対する異議申し立てをおこなう。そのような力学のなかでイメージは再調整されていく。第7章に登場する異教的儀礼もまた、絶え間ない植民地の力学のなかで再生するものとして捉えられている。すなわち、先住民共同体では、ヨーロッパから持ち込まれた疫病や、スペイン人の課税賦役によって、絶えず人口喪失が生じている。しかも、スペイン人農場の拡大や集住政策によって、生業の基盤も掘り崩されつつあった。そのような存立の危機への処方箋として、異教とされた数々の儀礼が新たな重要性を獲得する。したがって、儀礼にこめられた意義は、先スペイン期のものとは同じではないし、その時々々の条件によっても揺れ動いていく。インディオ的なるものは、このように常に再定義され、書き換えられていく開かれたプロセスとして描き出されている。

むしろ、このプロセスは、暴力や利害抗争をともなった植民地的な状況のなかで生起しており、無邪気なものではまったくない。本書が細心の注意をはらって検知しようと努めているのは、そこに加えられた非対称的な力学である。例として、第4・5章を見てみよう。主人公であるリマ市サン・ラサロ地区のインディオたちが、集住区（セルカード）への移住を余儀なくされたことを契機として、チチカカ湖に縁起を持つコパカバーナの聖母を本尊とする信心講を立ち上げ、やがて元来の地区へと帰還を果たす過程が取り上げられている。これは、自らのアイデンティティを再定立しようとするインディオたちの闘いのプロセスでもある。しかし、同時に著者がつきとめるのは、まず彼らの集住区への移住には、この地区を管轄するイエズス会や、サン・ラサロ地区の土地を狙うスペイン人の利害が働いていたことである。さらに、コパカバーナの聖母が選ばれ、やがて彼女がおこす奇蹟が喧伝されていく背後には、集住区をイエズス会から奪還しようとする大司教側の意図が作用している。しかも、市の大聖堂に移管された聖母や信心講を食い物にしようとする神父たちも登場する。そのような多様な利害がうずまくなかで、信心講は立ち上がり、聖母は涙を流し、もとのサン・ラサロ地区に御堂を建てるべくインディオたちは奔走するのである。この二つの章に限らず、第7章では偶像崇拜根絶の巡察をはじめた神父が、実はインディオから告発されていたこと、さらには巡察に加担することで既存の首長層の権威に挑戦するラディーノと呼ばれるインディオたちの存在も指摘されている。あるいは、第9章で複数のインカ観が生起する文脈として描き出されるのは、スペイン人との非対称の関係性や、インディオ社会に生じている亀裂や抗争といった力学である。

こうしてみると、「生身としてのインディオ」も「観念としてのインディオ」も静態的なものではないし、両者の関係も一対一に固定化できるわけではなく、植民地の力学にさらされながら、絶えず変動しているのである。

史料論としてのインディオ性

しかも、インディオ社会に作用する植民地的な諸力は、単に事例の背景として言及されているわけではない。本書が一貫して提示しているのは、この力学が、史料の記述に具体的な負荷として作用している様態である。ここで、先に本書の軸として評者が提示した「史料論」が重要になってくる。この点がいちばん明確なのは、書き下ろされたふたつの章である。まず、第3章で取り上げられるのは、まさに史料の作成に立ち会う通辞たちである。インディオのなかには現地のケチュア語しか話さない人びとも多いため、彼らの言葉をスペイン語の行政文書に導入するためには、どうしても通辞の助力が必要になる。通辞は通常の史料では透明な存在であるが、その姿が垣間見える瞬間がある。例えば、インカ王アタワルパの捕縛と処刑の際に通辞であったフェリピリヨは、初期の史料ではほとんど言及されないが、後代の記録になると、その稚拙な通訳によってこの惨劇を生み出した張本人として断罪されていく。ここに立ち現れるのは、先住民言語であるケチュア語とスペイン語とを架橋することの困難さだけでなく、通辞が問題化されていく力学である。

いまひとつ書き下ろされた第6章では、先住民たちの4通の遺言書が取り上げられている。史料に働く力学が、とりわけ鮮明に立ち現れてくるのは、4番目の事例である。遺言人は先述の聖母コバカーナ信心講の重要なメンバーであり、この信心講とイエズス会神父との間で、遺産の寄贈先をめぐる係争が起きた。その訴訟記録からあらわになるのは、遺言状やその補足書がこの神父や遺言人の夫の圧力のなかで書かれていた可能性である。

このふたつの章に加えて、史料に作用する力学を活写しているのは、第7章の補遺である。ここに収録されているのは、偶像崇拜根絶巡察の際に実施された取り調べの記録である。記録から明らかになるのは、被疑者に加えられる有形無形の非対称的な威力である。そうした威力のもとで、被疑者の揺らぎを持つはずである言葉はスペイン語化されたうえで、捜査する側が用意する悪魔という観念にあてはめられていく。それ以外にも、聖母コバカーナのおこした奇蹟に対する証言から、インディオたちが周到に排除されているとする第4章の指摘など、こうした植民地的力が史料に働くさまは、本書の随所に見て取ることができる。

もちろん、史料を操作しようとするのは、なにもスペイン人だけではない。スペイン植

民地行政が編み出した文書主義を果敢に学び取り、自分なりに実践しようとするインディオたちもいる。公証制度に依拠して、自らを防衛しようとするヤナコーナ（第2章）、聖母コパカバーナの御堂を建てるべく請願書を作成する都市インディオ（第5章）、正統なるインカの末裔として自らを定立すべく証書を提示するコンドルカンキ（第9章）、その他にもスペイン語文書を操ろうとするインディオの姿は、本書のいたるところに見いだすことができる。彼らは、植民地支配の圧倒的な威力におののきながらも、おずおずとあるいは大胆に文書行政へと身を投じていく。つまるところ、史料を透明に読むことを妨げているのは、インディオを取り巻く人びとだけではなく、インディオ自身でもあるのだ。

以上のように考えてくるならば、われわれ読者が、痛感させられるのは、史料がけっして透明な窓ではなく、それを成立させる諸々の威力によって複雑に屈折した弱い光のなかでしか、過去を見ることができないことであろう。そういう恵まれない条件のなかで、インディオたちやインディオ的なものを垣間見ようと、著者は目をこらしている。それこそが『インディオ社会史』というタイトルで表現しようとした著者の姿勢であろう。

これは、単なる印象にすぎないが、評者が本書を読みながら感じたのは、薄暗い照明しかあたらない舞台である。読者という観客には、そこに何かうごめいていることを感知することしかできない。すると、裾に登場した著者が、舞台を見るうえでの注意事項や、舞台装置や登場人物について少しずつ説明しはじめる。それにつれて、読者は、薄暗がりのなかでも、舞台上でおきていることをおぼろげに見ることができるようになる。著者自身が第*x*章で認めているとおり、最後まで「インディオとはなにか」という説明はなかった。しかし、評者は読後感として、「インディオ」という言葉が指し示すのはおぼろげなホログラムのようなものだ、という印象を抱いた。それは、無理に強力なスポットライトで照らし出そうとすれば、雲散霧消してしまう。著者が追求するのは、暗闇にある「インディオ」を暗いままに感知する術である。

このことは、史料の編集を極力おさえて提示しようとする姿勢にあらわれている。先述の第7章補遺に登場する被疑者のインディオ女性の陳述は、その一例である。また、第5章で、聖母コパカバーナの御堂をサン・ラサロ地区に移すべくインディオたちが書いた請願書が、その拙い筆致のままに日本語に訳出されていることも、これに相当しよう。彼らのか細い声を、われわれが簡単に理解できるような字幕で解説することを、著者は慎もうとしている。それよりも、その発話のコンテキストを丹念に描くことで、小さな声を何とか聞きとろうと努めるのである。この態度こそが、本書が未刊史料の持つ魅力を十全に引き出すことに成功している秘訣のひとつである。

結語

以上、評者なりに本書の特徴について考えてきた。残る課題は、本書を評者がどのように受け止めるべきか、という点である。インディオ的なものを諸力のぶつかり合うプロセスとして捉える視点や、史料に寄り添いその小さな声に耳を傾ける姿勢は、植民地史を研究する立場としては、ただちに見習いたい。

では、扱われている主題のなかで、アンデスではなくメキシコなどのメソアメリカ地域を専門とする研究者に即応しうるものがあるだろうか。ひとつの可能性は、都市インディオへの視線である。メソアメリカの場合、都市に住まうインディオを主たる対象に据えた研究は、植民地時代前半についてはあまり多くはない。その理由を明示する力量が評者にはないが、おそらくは都市研究で主たる関心が注がれたのが、インディオよりも混血者（メスティソ）であったことが大きい。けれども、メスティソと名指された人びともまた「観念としてのインディオ」の担い手たりうることは、本書が十二分に論じているとおりである。では、「観念としてのメスティソ」はどうだろうか。そういうものがあるとすれば、その担い手もメスティソだけではないはずである。この2つの観念が形成されるプロセスはどのように異なり、お互いにどのように関係しているのか。メソアメリカ研究の重要な課題のひとつがここにある。

いまひとつは、広域を移動するインディオというテーマである。本書には、大西洋を越えてスペインへと至るインディオたちが、若干とはいえ登場する。例えば、通辞となるべくしてピサロに付き従いスペインへと赴いたインディオたちはその好例であろう（第3章）。アンデスやメソアメリカといったひとつの地域を超えて、スペイン帝国全体を強制的あるいは自発的に移動するインディオがどのような人びとであり、どれだけの規模で存在したのか。その様態の解明は、まだ緒についたばかりである。これはさらに深めてみたい問いである。さらにいえば、そうしたインディオの帝國的な移動と並行して、アンデスやメソアメリカ地域で醸成された「観念としてのインディオ」がグローバルに流通する現象も観察されている。では、このふたつの広域な動きが、どこかで交わることはあるのだろうか。どちらの問いも、評者にとってはすぐに答えることは難しいが、取り組んでみたい。